

琵琶湖における魚類の変遷

琵琶湖を戻す会 高田 昌彦

1. 琵琶湖を戻す会とは

琵琶湖では、1980年代に入っところからオオクチバス（以降ブラックバス）との本格的な闘いが始まりました。それでもその頃はまだ、琵琶湖の南湖でもタナゴ、モロコ類を狙って釣ることができ、半日も釣ればバケツの底が真っ黒になるほどでした。そんな小魚も1990年代に入ると全く釣れなくなり、その代わりにブルーギルが“いくらでも”釣れるようになりました。当時、琵琶湖の外来魚問題はマスコミでも報じられてはいましたが、地元の滋賀県民でもブラックバスやブルーギルを実際に見たことのある人は少なく、外来魚問題が広く浸透しているとは言いがたい状況でした。これまでと変わらず豊かな水をたたえて美しく見えていた琵琶湖の中では、在来魚が外来魚に食い尽くされようとしていたにもかかわらずです。そこで、この問題を広く市民に訴える必要を感じて、2000年の春に一般公募の“外来魚駆除大会”を開催しました。その主催団体として立ち上げたのが「琵琶湖を戻す会」です。そんな琵琶湖を戻す会の活動を通して見てきた琵琶湖の魚類の変遷をお伝えしたいと思います。

会設立の翌年からは年4回（春2回、秋2回）の外来魚駆除大会を開催し、それは今も継続しています。水の中で起こっていることは湖岸から眺めるだけではわかりません。そこで、外来魚駆除大会では釣りを通してどんな魚が釣れてくるかを見ることで、湖の中で起こっていることを実感してもらおうと考えました。琵琶湖を戻す会では“1匹でも多くの外来魚を駆除する”よりも“一人でも多くの理解者を増やす”という啓発活動に重きをおいてきたので、釣り方も外来魚釣りにありがちなルアーやリールを使うのではなく、のべ竿に玉ウキをつけて餌はミミズでという、かつて琵琶湖岸でおかず捕りや雑魚釣りに使われてきたやり方にこだわりました。それは、そのような釣り方をもってしても、今の琵琶湖では、ブラックバスとブルーギルというたった2種類の外来魚しか釣れないことを体験してもらいたかったからです。

2. 活動を通して見える魚類の変遷

琵琶湖を戻す会が活動をはじめた2000年は、すでに湖岸で釣れる魚はブルーギルとブラックバスばかりでした。特に会場としている琵琶湖の南湖は、琵琶湖総合開発によって浅瀬が埋め立てられ、湖岸は急勾配の石積み護岸にされ

たため、これら 2 種類の外来魚の生息に適した環境に変わってしまいました。なので、外来魚駆除大会でも釣れてくるのは外来魚ばかりで、在来魚は 3~4000 匹に 1 匹程度しか釣れません。特に会場周辺はブルーギルが多く、8 割以上をブルーギルが占め、残りがブラックバスとほんの僅かな在来魚という状況でした。そのような中である時、大会会場の琵琶湖岸に大量の水草が打ち寄せられていたことがありました。参加者には水草の塊と湖岸の僅かな隙間で釣ってもらったのですが、その時はブルーギルに混じってホンモロコやカネヒラなど、いつになくたくさん在来魚が釣れました。きっと水草の塊が“防波堤”になってブラックバスが湖岸に近寄れなかったのだと思います。つまり、ブラックバスさえいなくなれば、まだまだ周辺の川や水路から在来魚が供給される余地があることを実感しました。

外来魚駆除大会は、主に“津田江 1 (北) 湖岸緑地”という場所で開催しているのですが、日によってバラツキはあるものの、春の駆除大会では平均 40kg/日のブルーギルが釣れていました。それが 2017 年の春には 1 日で 184kg ものブルーギルが釣れてしまいました。それまでは年を追う毎に順調に減り続けていたのに、活動 18 年目にして過去最高の駆除重量を記録してしまったことに大きなショックを受けました。

3. ブルーギルが釣れない

そんなブルーギルですが、昨年(2019 年)ころから突然釣れなくなりました。1 日に 200kg 近く釣れたこともあったものが、去年は 1 年間で計 100kg にも満たない量しか釣れませんでした。直近の今年 9 月の外来魚駆除大会に至ってはたった 4.8kg しか釣れず、しかもその約半数はブラックバスでした。去年は滋賀県からも“琵琶湖のブルーギルが 1/100 に激減した”との発表があり、このニュースは「ブルーギル激減は水草の減少と関連か 県が実態調査」(2019/05/29 中日新聞)など各紙でも取り上げられました。琵琶湖の漁師さんにもたずねてみると、「これまではブルーギル 9 割、ブラックバス 1 割だったものが、今(2019 年)はその割合がみごとに逆転している」とのことでした。ブルーギル激減の理由の一つとして滋賀県は「水草の減少によってブルーギルの餌場・隠れ場がなくなり、ブラックバスに捕食されたため」とコメントを出していますが、はっきりとしたことはわかっていません。そんなブルーギルの減少を裏付けるように、去年はホンモロコの産卵場所の拡大や、滋賀県の絶滅危惧種であるシロヒレタビラの増加などが見られました。直接の捕食者であるブラックバスは相変わらず多いため本格的な回復とは言えませんが、これらの在来魚とは直接のライバル関係にあるブルーギルの減少が、在来魚の増加に好影響を与えていることは間違いありません。

4. 琵琶湖の魚類の今後

とは言うものの、激減した理由がハッキリとわからない以上、いつまたブルーギルが大増殖に転じるかもわかりませんし、卵や稚魚にとっての最大の天敵であるブルーギルが減っている中で、ブラックバスは繁栄の兆しを見せています。琵琶湖を戻す会が毎年真夏に開催している“エリ漁体験”のイベントでは、琵琶湖沖に設置されたエリ（定置網）の水揚げを参加者に経験して貰っているのですが、例年だと網の中は大量のブルーギルで溢れているのですが、去年はたったの3匹しか入っていませんでした。その代わりに網の中はおびただしい数のブラックバスの稚魚で満たされていました。これらの稚魚がすべて成魚になれるわけではありませんが、“ブルーギル不在”に乗じてブラックバスの繁殖が“大成功”しているのは間違いないでしょう。

さらに近年琵琶湖では、新たな外来魚“チャンネルキャットフィッシュ”の増加に怯えています。闇に乗じて湖底を移動するこの魚はなかなか実態が掴めず、生態系や漁業への影響が確認されたところには手遅れになっている可能性が高そうです。特に琵琶湖にはチャンネルキャットフィッシュから直接の影響を受けそうなナマズやギギ、さらには琵琶湖固有種のビワコオオナマズやイワトコナマズなどがおり、今後の行方から目が離せません。琵琶湖には45種類の在来魚がおり、そのうち16種類が琵琶湖固有種です。これらの宝を次世代に引き継ぐためにも、これ以上の外来魚の拡大を何としても食い止めなければなりません。